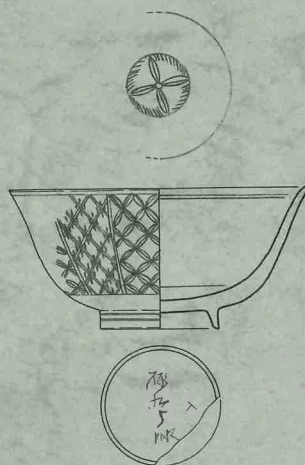


府内城三ノ丸遺跡II

大分県共同庁舎前広場モニュメント建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書



1994

大分県教育委員会

序 文

大分県教育委員会では、大分県共同庁舎の新設に伴い平成3年度に庁舎建設予定地の発掘調査を行いました。この付近は、江戸時代には府内城三ノ丸と呼ばれており、当時の武家屋敷地に相当する地点です。発掘調査では陶磁器類などをはじめとする江戸時代の遺物が多量に発見され、当時の生活を知る上で貴重な資料となりました。

平成5年度には県庁前広場にモニュメント（記念碑）の建設が計画され、庁舎建設地の調査成果から、この地点にも江戸時代の遺構・遺物が存在することが予測されたため、発掘調査を実施しました。本報告書はこのモニュメント建設予定地の発掘調査の詳細を記したものです。今回の調査では、調査面積が狭かったにもかかわらず、府内藩御用人の木戸孫九郎の文字の入った陶磁器や中世段階に遡る土器類など、貴重な考古資料が発見されました。

本書が、近世考古学や府内藩の城下町研究に帰与することができれば幸いです。また、調査に御協力いただきました関係者の方々に対し、深く敬意を表すとともに厚くお礼を申し上げます。

平成6年3月

大分県教育委員会

教育長 宮本高志

例 言

1. 本書は、平成5年度に発掘調査を実施した大分県共同庁舎前広場のモニュメント（記念碑）建設（大分市大手町3丁目1番1号所在）に先立つ埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は大分県教育委員会が主体となり、平成5年7月19日から8月3日に実施した。
3. 遺構・遺物の図面作成、トレース等は調査担当者が担当した。
4. 本書の編集・執筆は吉田寛（大分県教育庁文化課主事）が行った。

目 次

I. 調査の経緯と調査地点	1
II. 発掘調査の成果	
(1) 基本層序と遺構	4
(2) 出土遺物	
①土器・陶磁器類	6
②金属製品・石製品・土製品	16
③瓦類	16
III. まとめ	19

I. 調査の経緯と調査地点

大分市は江戸時代の府内城下町から発展した都市である。府内藩2,2万石の町人町である府内城下町および武家屋敷が存在した府内城三ノ丸は、埋蔵文化財を包蔵する土地—いわゆる「周知遺跡」—として周知されている遺跡である (Fig.1)。これに基づき、大分県教育委員会では1991年4月から6月にかけて、府内城三ノ丸の一面に新設される大分県共同庁舎建設予定地の発掘調査を実施した。この調査は庁舎の建物部分を中心とした約2,120㎡を対象としたもので、陶磁器類をはじめとした多量の近世遺物がかなり良好な状態で包含されていた⁽¹⁾。その後1993年度になると、新庁舎広場の整備に伴い、1991年度の調査区南東約30mの地点にモニュメント (記念碑) の建設が計画された。当該地点も府内城三ノ丸遺跡に包括される地点に相当し、埋蔵文化財の存在が予測された。そこで大分県総務部総務課と建設課および大分県教育庁文化課は協議の上、モニュメント建設時の掘削に伴い地下遺構の破壊が予測される最小限の面積を対象として、発掘調査を行うこととした。発掘調査の期間は1993年7月下旬から8月初旬にかけてである。調査面積は当初約36㎡を対象としたが、工事計画の都合から調査区を西側に拡張する必要が生じ、最終的には約45㎡を発掘調査の対象とした。調査面積はごく限られたものであったが、検出された土坑内部からは中・近世の遺物が予想外に多量に出土した。

さて今年度の発掘調査地点は、大分市史編纂委員会が1987年に提示した府内城下町復元図⁽²⁾ および文久3年 (1863) 作成と伝えられる「豊後府内藩御家中名前付」(Fig.2) によると、府内藩の上級武士木戸孫九郎の武家屋敷が存在する地点であった (Fig.3)。木戸孫九郎は天保

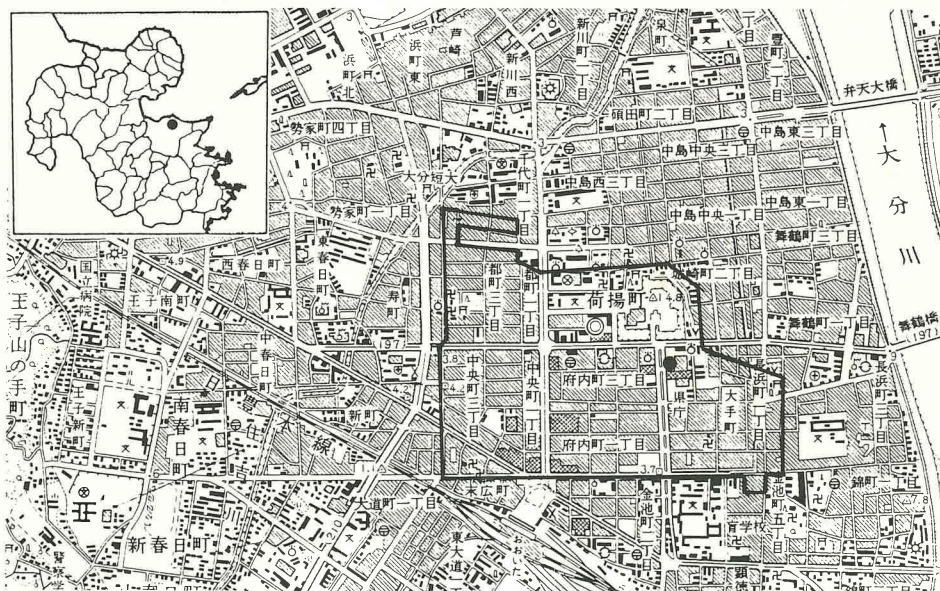


Fig. 1 府内城下町と周辺地形図 (S=1/25,000) ドットが調査地点。

年間（1830～1844）頃には家老職を務めており、また大給松平府内藩の最後の藩主である松平近説の時に発行された『武鑑』（万延元年＝1860発刊）に「用人」のひとりとして記されていることから、江戸時代末期の府内藩の要職にいた人物であることがわかる。今回の調査では武家屋敷の施設に直接関わる区画や礎石などは発見できなかったが、後述する土坑S K 1の埋土中から「入 孫九郎様」という朱描きの焼継文字を有する肥前染付端反碗（Fig. 7－1）が検出されており、当該地点が木戸孫九郎の武家屋敷であることを考古学的に裏づけることになった。さらに土坑S K 4の埋土中からは、室町時代の15世紀前半に遡る土師質土器の坏や土鍋（Fig.13－3～5）が検出され、江戸時代の城下町成立以前にも、当該地点付近に遺構・遺物の分布が認められることが明らかになった。

以上のように調査面積が狭いにもかかわらず、今回の調査によって、江戸時代の城下町の様相やそれ以前の生活痕跡に対する多大な情報を得ることができた。現在の大分市街地下に埋没する府内城関連の近世遺跡についても、他時期の遺跡と同様の注意を払い、今後の諸開発に慎重に対応していかなければならない必要性を痛感するものである。

註（1）大分県教育委員会『府内城三ノ丸遺跡』（1993年）

府内藩の歴史的環境や城下の形成過程等については、上記文献を参照されたい。

（2）大分市史編さん委員会『大分市史』中（1987年）

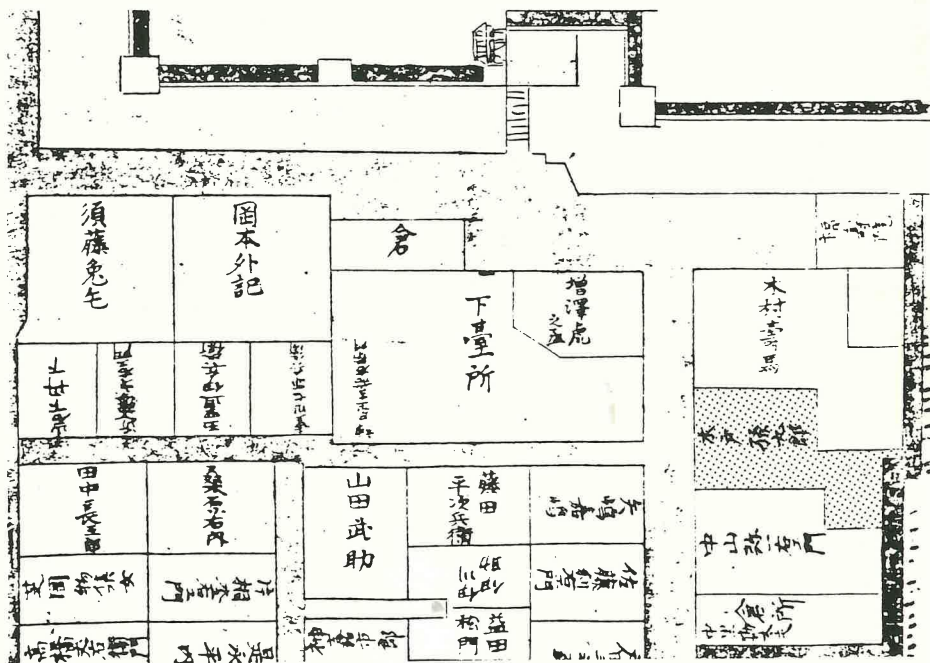


Fig. 2 豊後国府内藩御家中名前付（写。文久3年＝1863作成。）
スクリーン・トーンの部分が木戸孫九郎宅地。絵図に描かれた区画と
Fig. 3の城下町復元図を参照されたい。

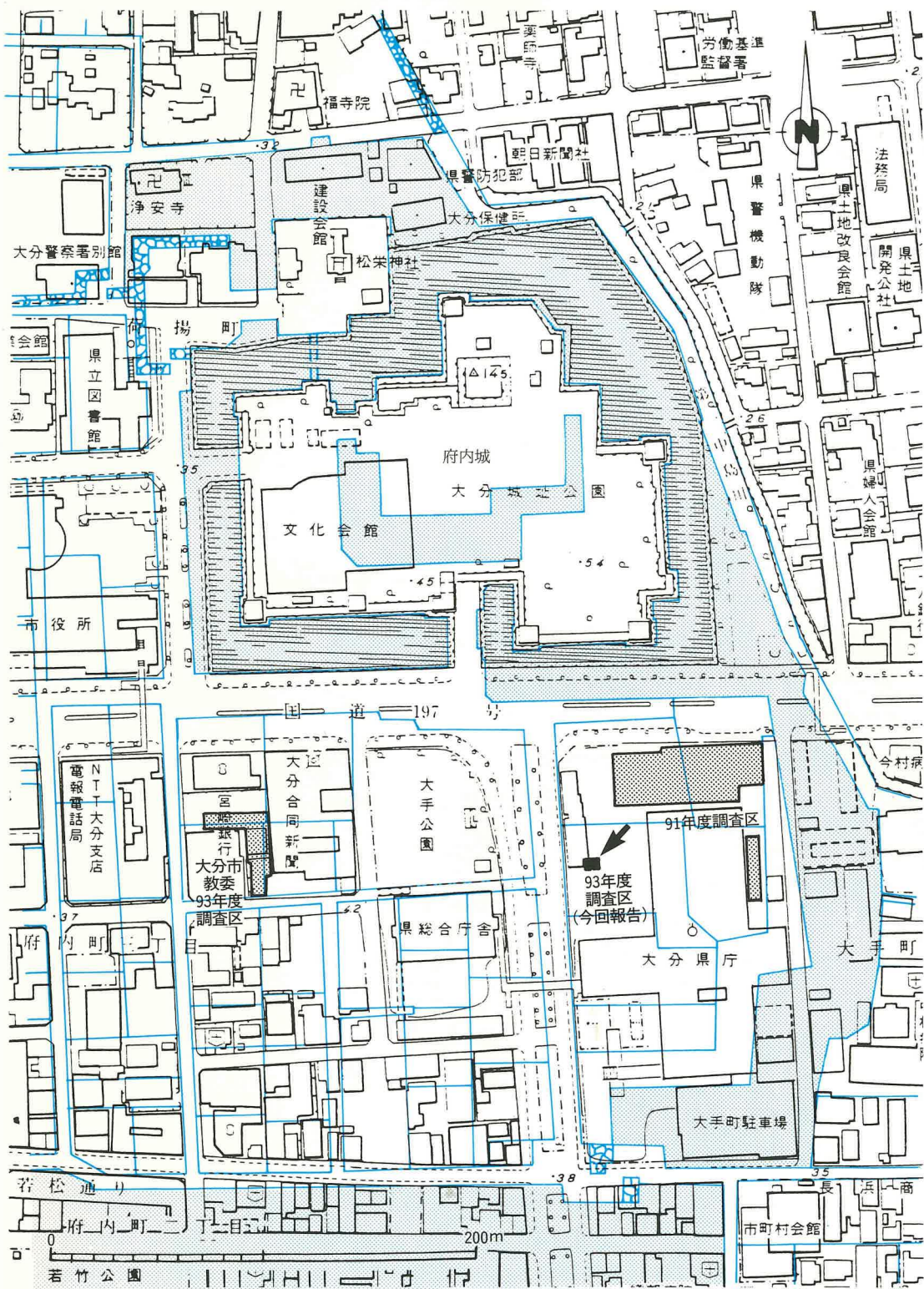


Fig. 3 府内城三ノ丸遺跡における発掘調査区 (S=1/3,000)

II. 発掘調査の成果

(1) 基本層序と遺構

調査面積は約45m²とわずかであったが、土坑6基および貝を集積した遺構1基を検出することができた (Fig. 4)。これらの遺構は土坑SK4が15世紀前半代に遡るほかは、すべて江戸時代後期の所産になるものである。

また土坑SK1の南東側から調査区南東隅に

かけて緩やかな落ち込み部が存在しており、調査区の制約でその性格は不明であるが、遺構あるいは整地層の可能性も考えられる。埋土中からは16世紀末から17世紀初頭に比定される唐津系鉄絵皿 (Fig.13-10) が出土しており、注意される。

本調査区の遺構検出は、時間的な制約から地山である灰褐色砂質土上面で行った。この地山は付近の古地形から推定して、旧海岸線付近に堆積した古砂丘に起因するものと考えられる。この層は非常に脆弱であり、近世段階でこの地山直上が生活面であることは考えにくい。従って、この層上に整地層を形成して生活面としたことが推定される。

調査区東壁の土層断面 (Fig. 5) の検討からは、3・4層 (暗褐色砂質土・褐色粘質土) が、一定程度の広がりを見せており、これらが近世段階の盛土であった可能性が考えられる。また貝の集積遺

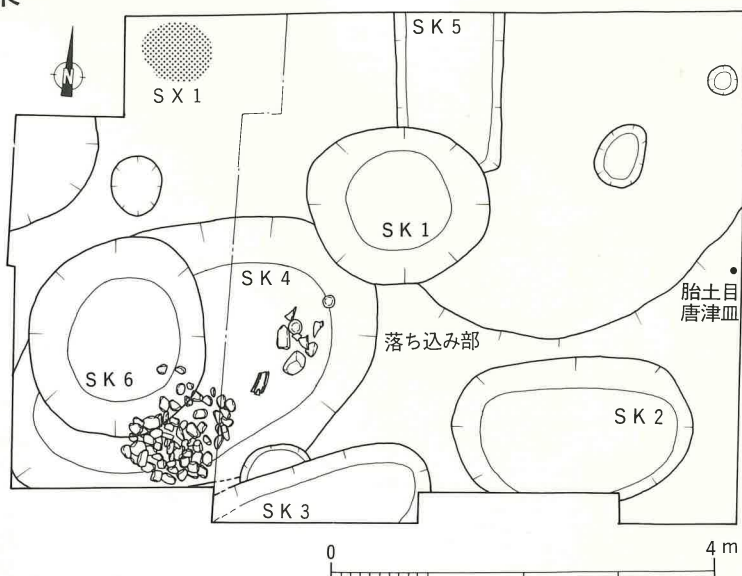


Fig. 4 調査区全体図 (S=1/80)

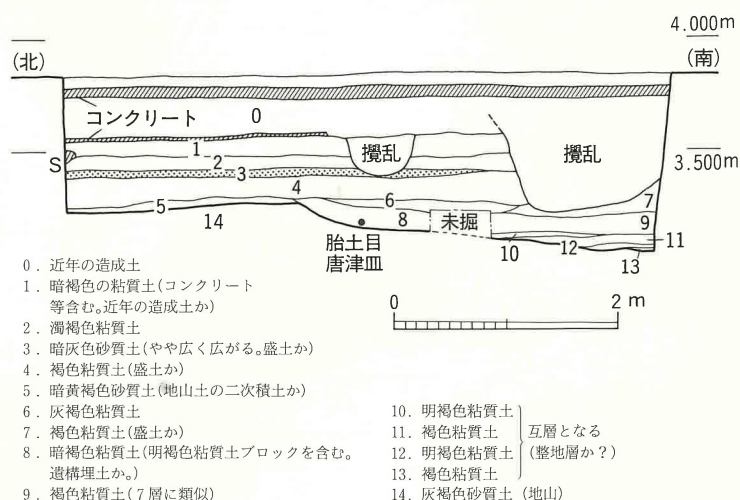


Fig. 5 調査区東壁土層図 (S=1/60)

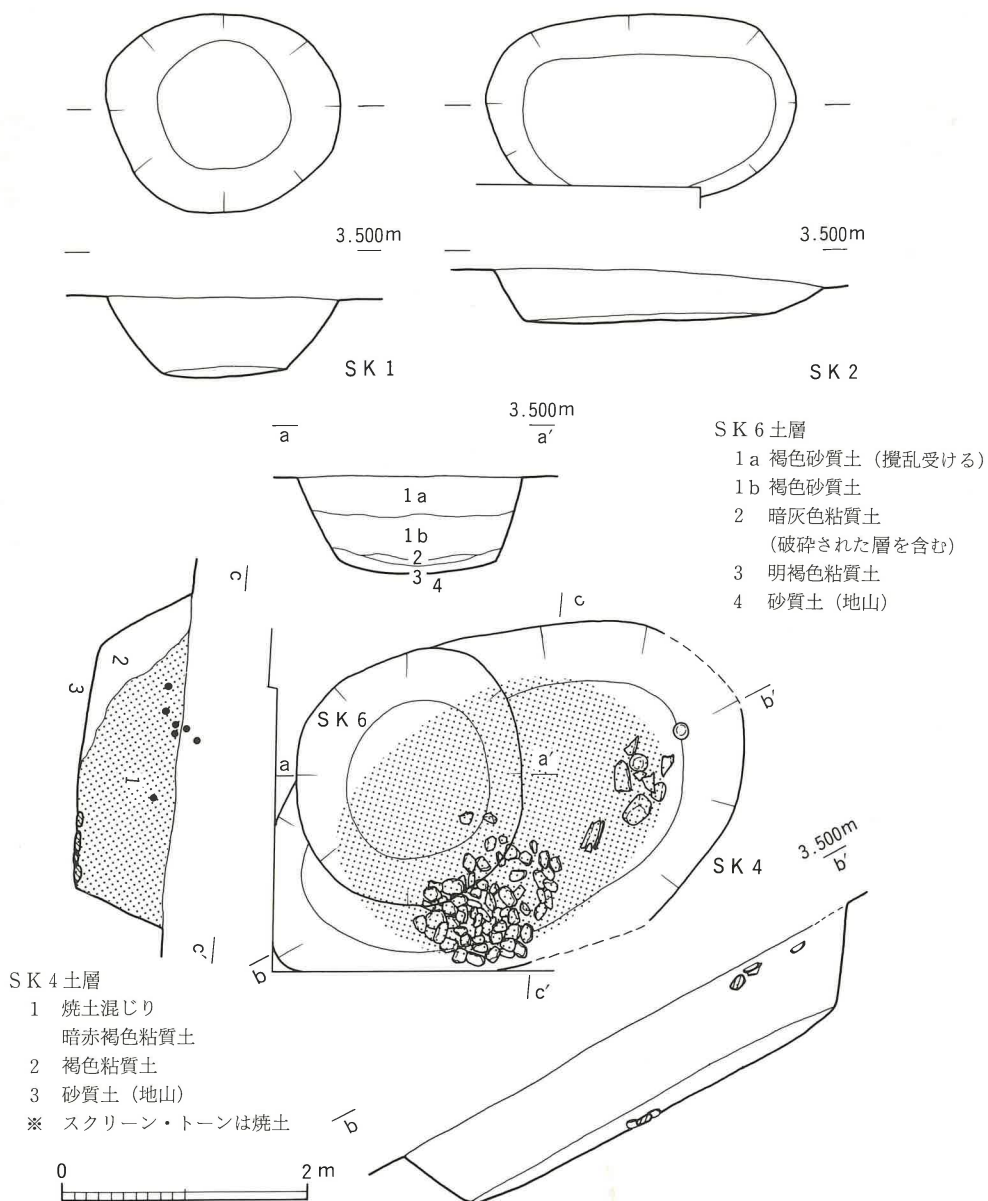


Fig. 6 土坑実測図 (S=1/60)

構S X 1は4層中に営まれており、当該土層が江戸時代後期頃に形成されたことが推定される。3・4層の層厚は30cm前後で、当該時期の整地層としては小規模なものであるといえよう。今後、他地点の調査でさらに検討を加えることが期待される。

以下、個々の遺構の詳細を紹介する (Fig. 6)。SK 1は直径約2 m、深さ0.7 mを測る平面形態略円形の土坑である。埋土中には多量の瓦を含み、検出時には瓦溜の状況を呈していた。

陶磁器類も出土しているが、瓦類の廃棄を目的として形成された廃棄土坑（ゴミ捨て穴）であろう。SK 2は長径2.5m、短径1.6m、深さ0.4mを測る平面形態略楕円形の土坑である。埋土中には陶磁器類や金属製品が含まれており、床面の一部からは少量の炭化材も検出された。これも廃棄土坑として形成されたものであろう。SK 3は検出部分の長径約2m、短径0.8m、深さ0.2mを測る平面形態長楕円形の土坑である。埋土中から土人形と思われる土製品の破片や少量の陶磁器類が検出されている。SK 4は長径4.5m、短径3.0m、深さ0.8mを測る平面形態略楕円形の土坑である。埋土の大半は焼土で形成されており、埋土上位には15世紀前半代に遡る土師質土器の坏2および土鍋1が廃棄された状況で検出された。坏はほぼ完存であったが、土鍋は破碎された状況であった。また西側の床面には被熱した拳大の川原石が集積された状況が認められた。SK 4は今回の調査で唯一中世段階に遡る遺構である。SK 5は検出部分の長辺1.7m、短辺1.1m、深さ0.2mを測る平面形態略長方形の土坑である。埋土は暗褐色粘質土の単一層で、南側をSK 1から切られている。出土遺物は認められない。SK 6は直径約2m、深さ0.8mを測る平面形態略円形の土坑である。埋土上位は近年の建物の基礎構築によって攪乱を受けており、また埋土下位には細かく破碎された貝類を含む層がレンズ状に堆積している。出土遺物は少量であるが、ほぼ完形に復元される土師質土器焙烙鍋等が出土している。SX 1は調査区東壁の4層（褐色粘質土）に対応する層中で検出された。検出地点は調査区北西隅の約0.7×0.4mの範囲で、比較的大型のハマグリ・サザエ・アワビ等の貝類が集積されたものであった。貝類の集積に伴う土坑掘方のライン等は検出されていない。貝類に混入した状況で、少量の陶磁器類が出土している。

（2）出土遺物

①土器・陶磁器類

一括出土資料を遺構あるいは出土地点ごとに、以下提示することとしたい。

SK 1 Fig. 7-1・2は肥前染付端反碗である。このうち1には焼継が認められ、内底部には「入 孫九郎様」と判読できる朱描きの焼継文字がみられる。当該資料の存在によって、SK 1付近が府内藩の家老や用人を務めた木戸孫九郎の武家屋敷敷地内であったことを考古学的に証明できたと考える。1・2の製作年代は1820～1860年代に比定される。3は肥前染付広東碗の底部で、製作年代は1780～1820年代である。4は18世紀後半以降の製作と思われる肥前染付碗の破片で、外面にややデフォルメされた帆掛け船が描かれている。破片の下位に焼継が施されている。5～8は瀬戸美濃産染付磁器の端反碗である。肥前産の磁器と比較して、文様の呉須の部分指でさわるとやや盛り上がったようなボツリした印象を与えるものである。製作年代は1820～1860年代に比定される。9は肥前染付蓋で、端反碗に対応するものである。1820～1860年代の製品である。10は肥前染付仏飯器で、18世紀代の製品。11は肥前染

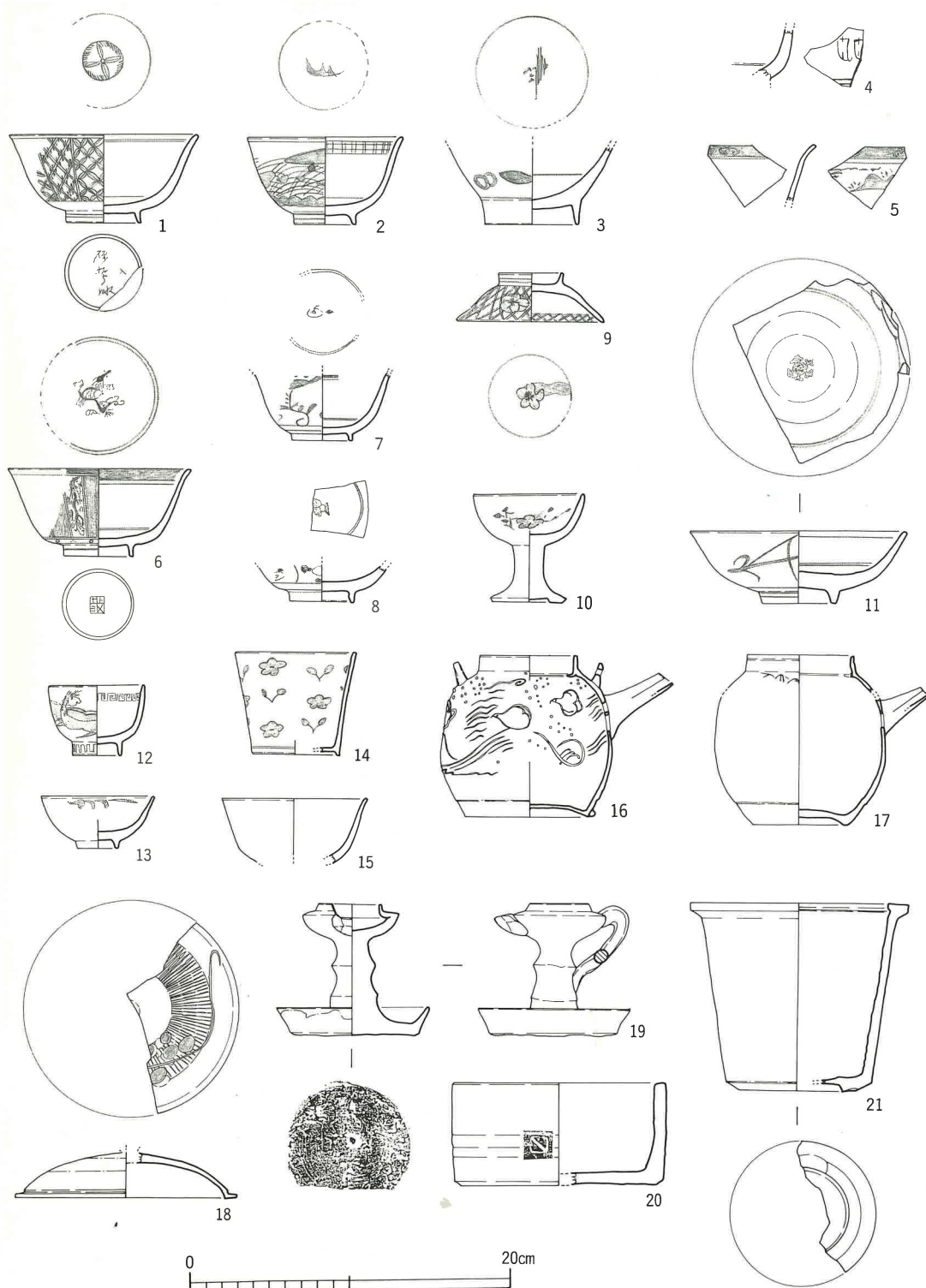


Fig. 7 SK 1 出土遺物① (S=1/4)

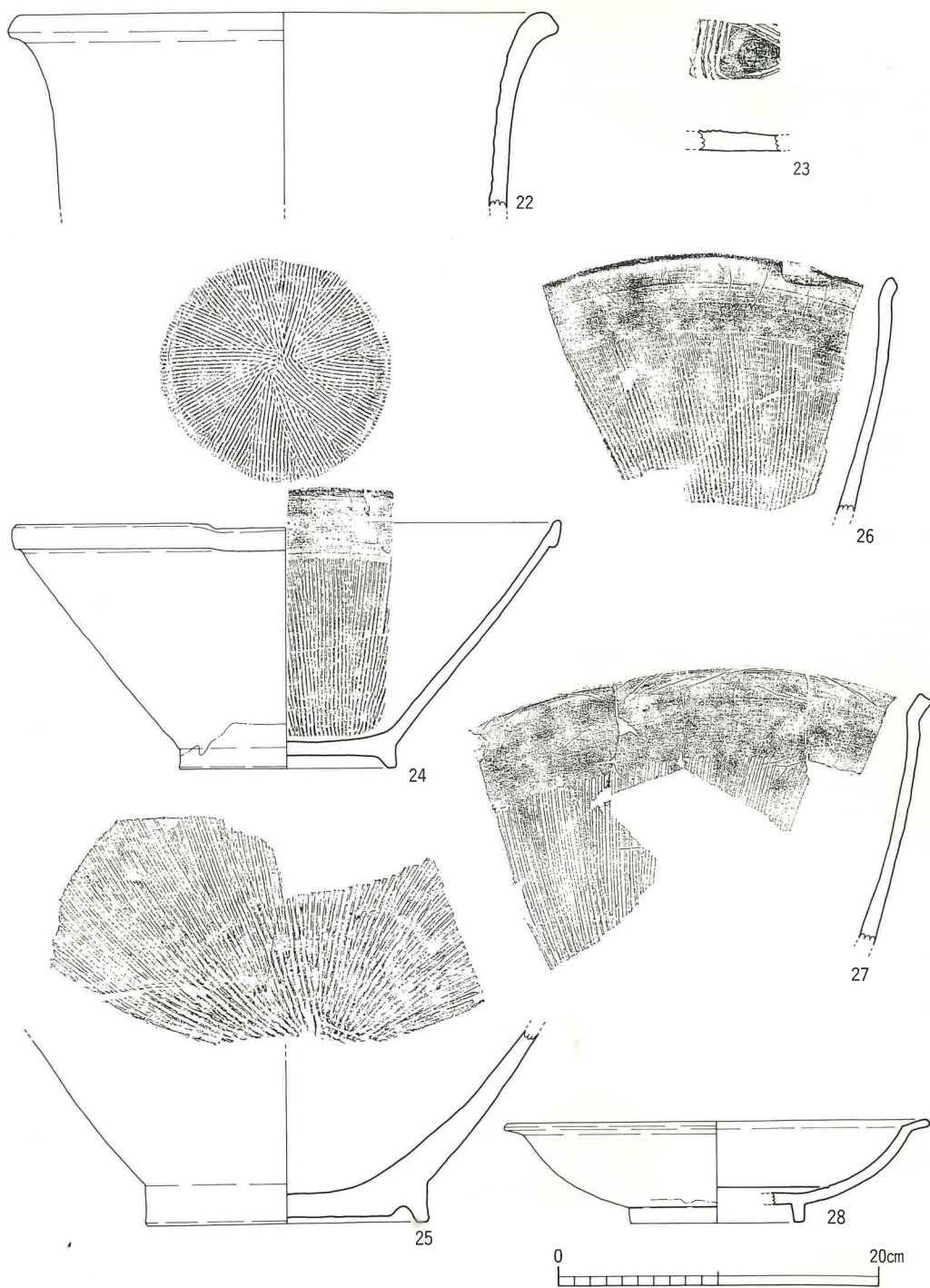


Fig. 8 SK 1 出土遺物② (S=1/4)

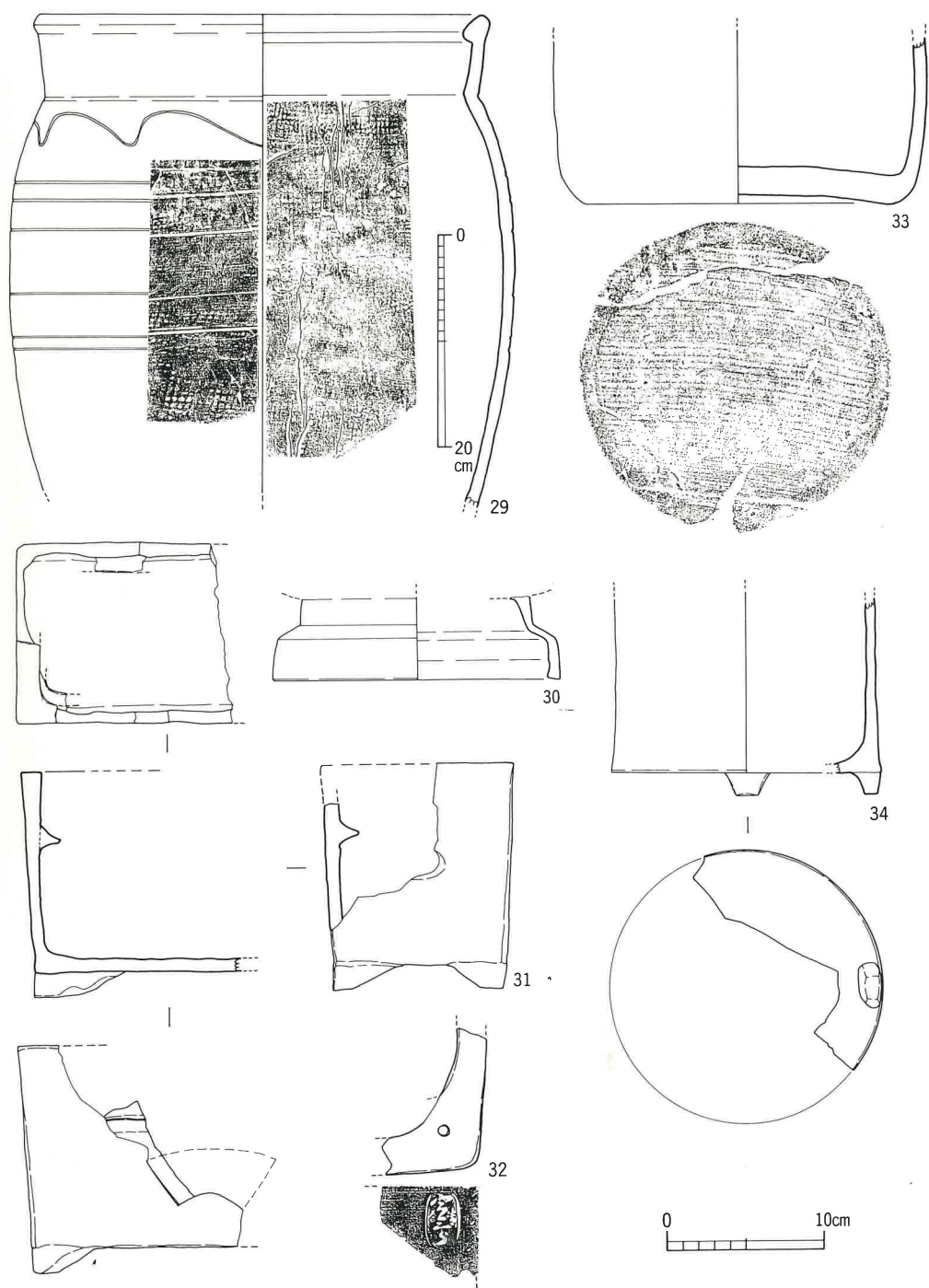


Fig. 9 SK 1 出土遺物③ (29はS=1/6、他はS=1/4)

付皿で、見込みは蛇ノ目釉剥ぎとなり、コンニャク印判による五弁花文が認められる。18世紀後半代の製品である。12・13は肥前染付小杯で、製作年代は前者が1820～1860年代、後者が18世紀後半から19世紀前半代に比定される。14は肥前染付猪口で、18世紀代の製品である。15は内外面に透明釉を施す関西（信楽）系陶器碗で、18世紀後半以降の製品である。底部を欠損している。16・17は関西系陶器土瓶で、これらも18世紀後半以降の製品。このうち前者の胴部文様は型打ち整形によるもので、外面に銅緑釉を施す。後者は外面に透明釉を施すもので、同一個体には間違いはないが、口縁部と胴部が接合していない。18は関西系陶器行平の蓋で、18世紀後半以降の製品である。19は外面に鉄釉を施す灯火具で、底部付近は露胎となり、回転糸切り痕（右回転）が認められる。19世紀前半代の九州産陶器であると思われる。20は陶器灰落しで、胴部外面に窯印と推定される刻印が認められる。産地は備前あるいは丹波と思われ、製作年代は19世紀前半代であろう。21は18世紀後半以降に比定される瀬戸美濃産陶器植木鉢である。内外面に透明釉を施し、露胎の外底部には穿孔を有すると思われるが、穿孔部は欠損している。Fig. 8－22は瀬戸美濃産陶器植木鉢あるいは手水鉢で、内外面に灰釉と緑釉を流し掛けしている。18世紀後半以降の製品である。23は陶器播鉢底部付近の破片で、内面の播目はいわゆるウール・マーク状といわれる特徴的な形態を呈するものと推定され、堺産陶器播鉢の可能性が極めて高いものである。18世紀後半から19世紀前半代の製品であろう。24～27は肥前唐津系陶器播鉢で、いずれも18世紀後半以降の製品である。28は九州産と推定される陶器鉢で、18世紀後半以降に比定できるものである。Fig. 9－29は肥前唐津系陶器大甕で、胴部内外面に叩きを施している。頸部付近にはヘラ描き波状文を施す。製作年代は18世紀後半から19世紀前半代に比定される。30は瓦質土器火鉢類の脚部で、胴部以上を欠損する。31は瓦質土器火鉢類で、上方からみた平面形態が長方形を呈するものである。内面には三角突帯、胴部には扇形の通気孔と、欠損しているが把手を有するものと思われる。他に欠損部分が大きいため図示していないが、別個体で内面突帯を持たない類似器形の瓦質土器火鉢類も出土している。32は瓦質土器焜炉で胴部外面の口縁端部付近には「請合 □三郎？」と判読できる可能性がある刻印を有する。刻印は焜炉製作者を意味する可能性が高い。当該資料のような形態を有する瓦質土器焜炉は、19世紀前半以降に出現するものである。33・34も瓦質土器火鉢類で、33は底部に板目状圧痕を有するもの、34は欠損部が大きいが底部に三足を有するものである。Fig. 10－35は土師質土器火鉢類の胴部破片で、外面に麒麟と思われる刻印文様を有するものである。破片が小さく、火鉢の全形を推定することができていない。なお、実測図中に提示した拓影図の左端部に接合痕跡と思われる整形痕が認められる。この接合痕跡の方向と麒麟の方向が約90度ずれており、拓影図が正位で提示できているかどうかの保証はできない。36は土師質土器焙烙鍋である。口縁部の立ち上がりが低いことや端部がやや肥厚して面をなすなどの特徴は、共伴した陶磁器類の年代と矛盾するものでなく、19世紀前半以降に比定できる。口縁外面の一部分に朱で

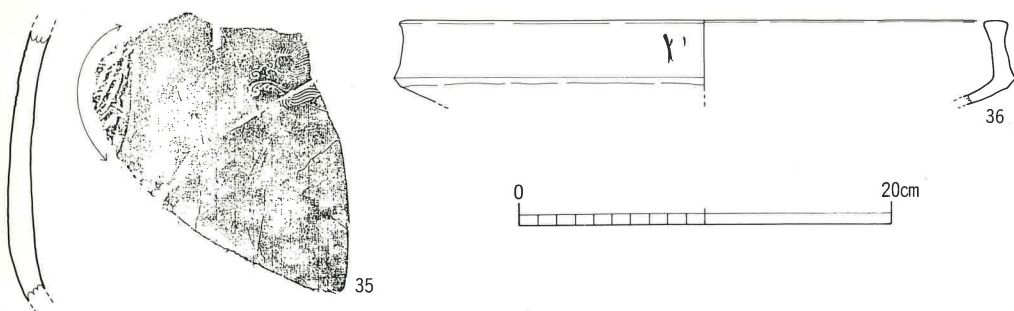


Fig.10 SK 1出土遺物④ (S=1/4)

記号あるいは文字を描こうとした痕跡が認められるが、その意味は不明である。

SK 2 Fig.11-1・2は18世紀後半代に比定される肥前染付碗である。3は肥前染付筒形碗で、見込みには手描きによって崩れた五弁花文を描く。製作年代は18世紀末から19世紀前半代に比定される。4～6は関西系陶器碗で、18世紀後半以降の製品である。いずれも内外面に透明釉を施す。7は唐津系陶器碗で、内外面に長石釉を施す。当該遺物は1580～1610年代に比定される製作年代の古いもので、混入品である可能性が高い。8～10は肥前産磁器の紅皿である。8は型打ち整形により菊花をかたどったもので、底部付近を除いて白磁釉を施している。18世紀後半以降の製品である。9・10は染付で、18世紀後半から19世紀前半代に比定される。10は外面に「大坂新町お笹紅」の文字の一部を描いており、長崎県長与窯で生産されたものであることが確認されている。11は磁器薄手酒杯で、18世紀末以降の関西産のものであろう。12・13は肥前染付皿で、前者は18世紀後半以降、後者は18世紀後半代の製品である。14は肥前染付散り蓮華で、これも18世紀後半以降に比定される。15は肥前染付蓋で、1820～1860年代に生産された端反碗に対応するものである。焼継が施された部分が認められる。16は肥前青磁染付蓋で、18世紀後半代に比定される。内底部と見込みに対応する部分には崩れた渦福と五弁花文が描かれている。17は肥前染付蓋で、1780～1820年代に生産された広東碗に対応するものである。18は関西系陶器蓋で、18世紀後半以降の製品である。19は器種不明であるが、赤褐色を呈する胎土を使用した底部破片である。内面の文様は型押しによって、打ち出している。関西系陶器で、19世紀前半代のものであろう。20は土師質土器で小型のものであるが、器種不明である。口縁部として図示した部分は擬口縁である可能性もあり、土人形の一部分である可能性も考えられる。ただし内面に布目は認められず、ナデが施されている。21は関西系陶器行平鍋で、18世紀後半以降の製品である。内外面には透明釉が施されている。22は「サナ」と呼ばれる土師質土器多孔皿状製品である。19世紀以降に出現する土師質・瓦質土器焔炉のオプション（付属品）として使用されたものである。23は肥前唐津系陶器播鉢で、18世紀後半以降に比定されるものである。

SK 3 Fig.12-1は「大坂新町お笹紅」の文字を描く紅皿で、肥前長与窯の製品であ

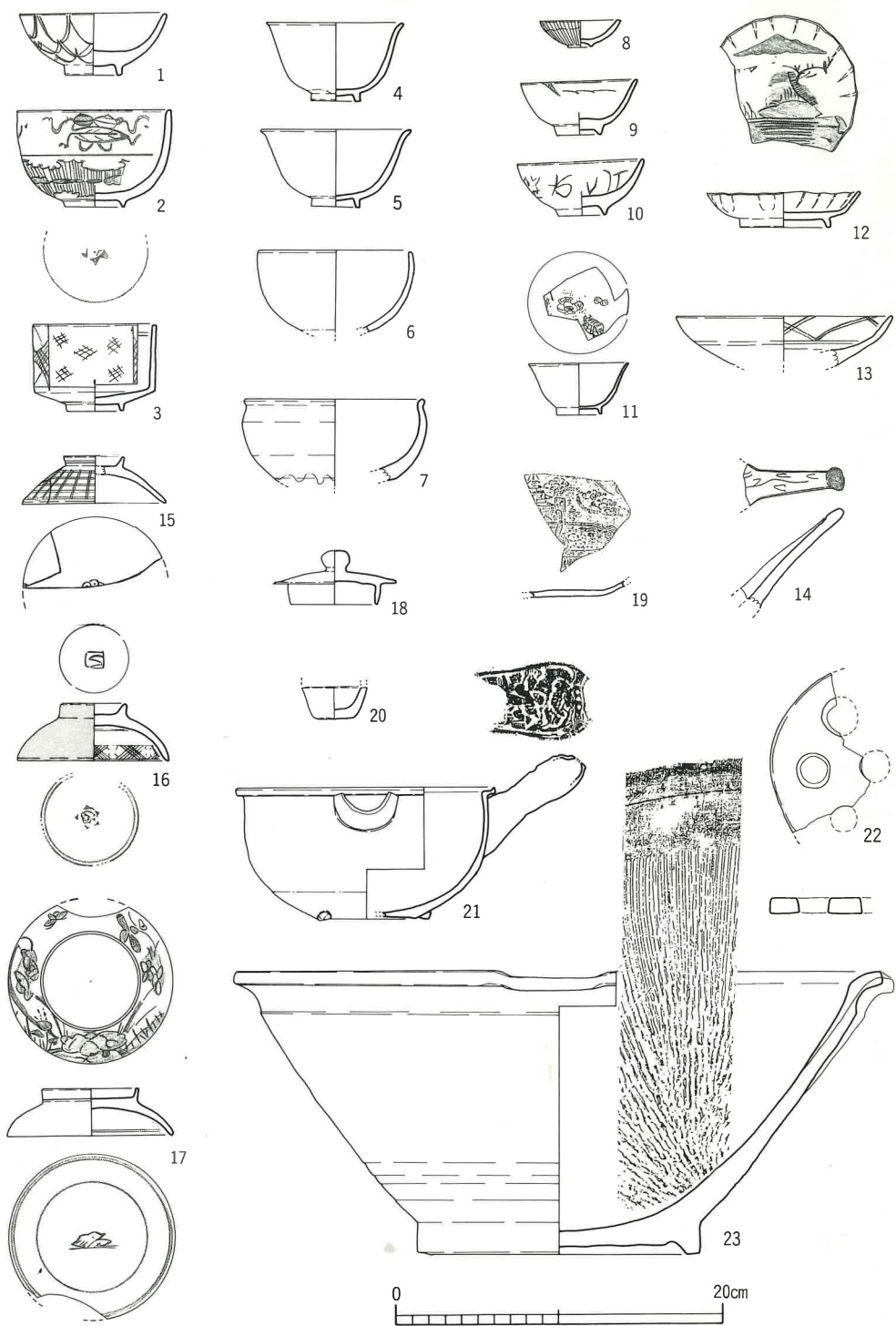


Fig.11 SK 2 出土遺物 (S=1/4)

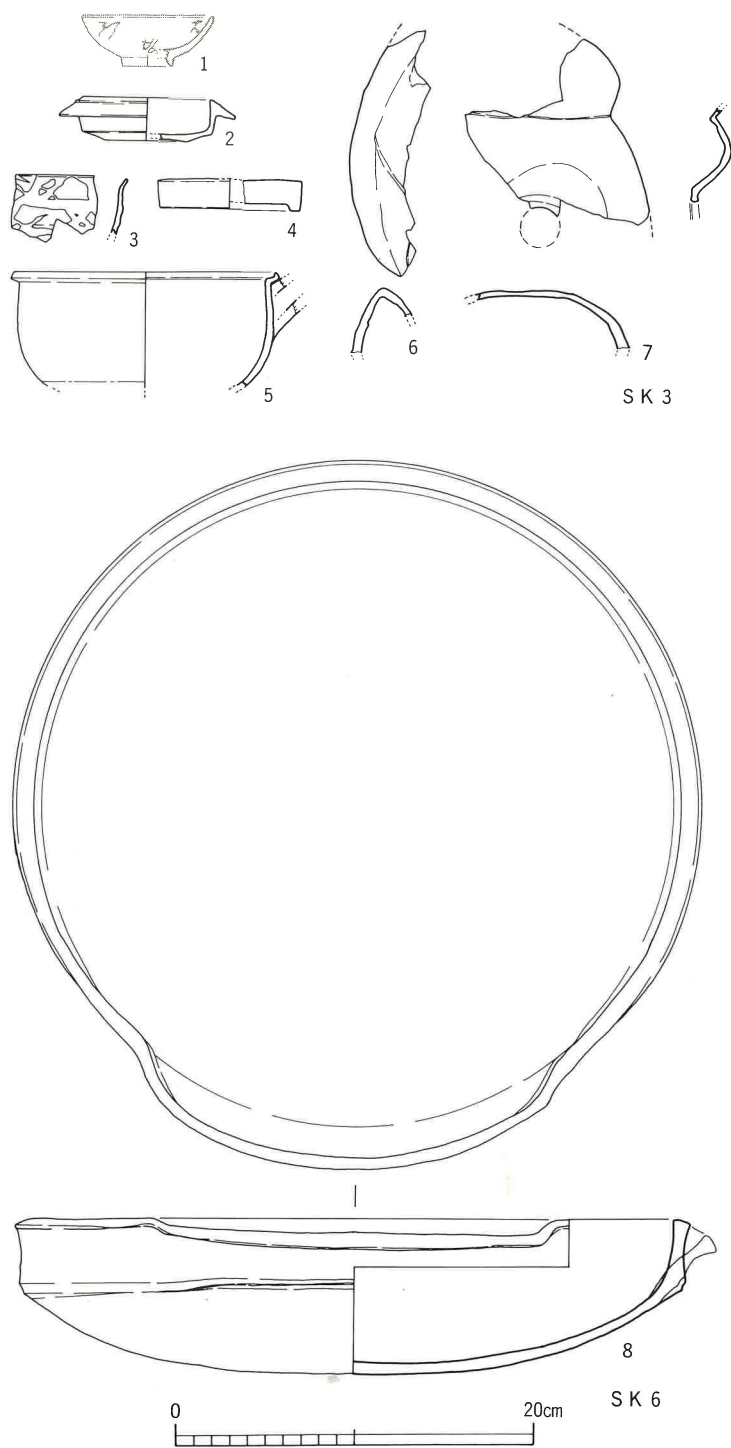


Fig.12 SK 3・SK 6 出土遺物 (S=1/4)

る。SK 2から出土したもの（Fig.11-10）と同類であるが、外面の字体が異なっている。18世紀後半から19世紀前半代に比定される。2は18世紀後半以降に比定される関西系陶器で、土瓶類の蓋である。3は長門（山口県）萩焼陶器のピラ掛け小碗で、19世紀前半代の製品。4は焼塩壺の蓋で、18世紀後半代に比定される「泉湊伊織」の刻印を持つものに対応するものである。内面には布目痕が認められる。5は内外面に透明釉を施す関西系陶器行平鍋で、これも18世紀後半以降の製品である。6・7は土人形であるが、破片のため何をかたどったものであるかは不明である。外面の表面にはキララと呼ばれる金雲母が施されたことが観察でき、また内面には布目痕と顕著な指頭痕が認められる。

SK 6 Fig.12-8は土師質土器焙烙鍋である。幅広の片口を有するもので、焙烙鍋としてはやや特異な形態を呈する。回転ナデが施された口縁部と外型作りによる底部を接合して整形している。口縁部と胴部の境には、接合に伴うへら削り痕が認められる。片口を持つ形態は特異な感じを受けるが、口縁部の立ち上がりが低めであることや端部がやや肥厚して面を持つことなどの特徴は、共伴する陶磁器類の年代と矛盾していない。Fig.13-1は肥前染付蓋で、1820～1860年代に生産された端反碗に対応するものである。2は18世紀後半以降に比定される肥前唐津系陶器播鉢である。

SK 4 Fig.13-3・4は土師質土器坏である。3は口径12.5cm、器高2.9cm、底径8.4cm、4は口径12.5cm、器高2.9cm、底径8.4cmを測る。底部はいずれも右回転の糸切り痕を有する。5は土師質土器土鍋で、口縁端部が斜めに傾斜して面を有する。内外面は刷毛目状の調整痕が認められる。3～5は器形の特徴から室町時代の所産になるもので、14世紀末から15世紀前半代に比定できよう。

SX 1 Fig.13-6は肥前産青磁の小型の碗である。飯事道具である可能性が高い。7は肥前染付碗で、18世紀後半代の製品。8は18世紀後半以降に比定される関西（信楽）系陶器碗である。底部付近は露胎となり、内外面に透明釉を施している。9は肥前染付広東碗の底部で、製作年代は1780～1820年代に比定される。

落ち込み部 Fig.13-10は肥前唐津系陶器鉄絵皿である。見込みには胎土目積みの痕跡が認められる。落ち込み部からはこの陶器皿1個体が出土しているのみで、当該遺物が直ちに遺構の年代を示すものかどうかは確認が取れていない。遺物の製作年代は1580～1610年代に比定される。

表土中 Fig.13-11は肥前染付小杯で、1820～1860年代に比定される。12は肥前染付紅皿で、18世紀後半以降の製品である。13は瀬戸美濃産磁器染付小杯で、口縁部は口紅となる。外面には隸字体文を描いている。この文様は瀬戸美濃産磁器に特有のものである。1820～1860年代に比定される。14は肥前染付皿で、蛇ノ目凹形高台の底部破片である。焼継が施されているもので、内底部には朱描きの焼継記号と判読不能の焼継文字が認められる。製作年代は18世紀

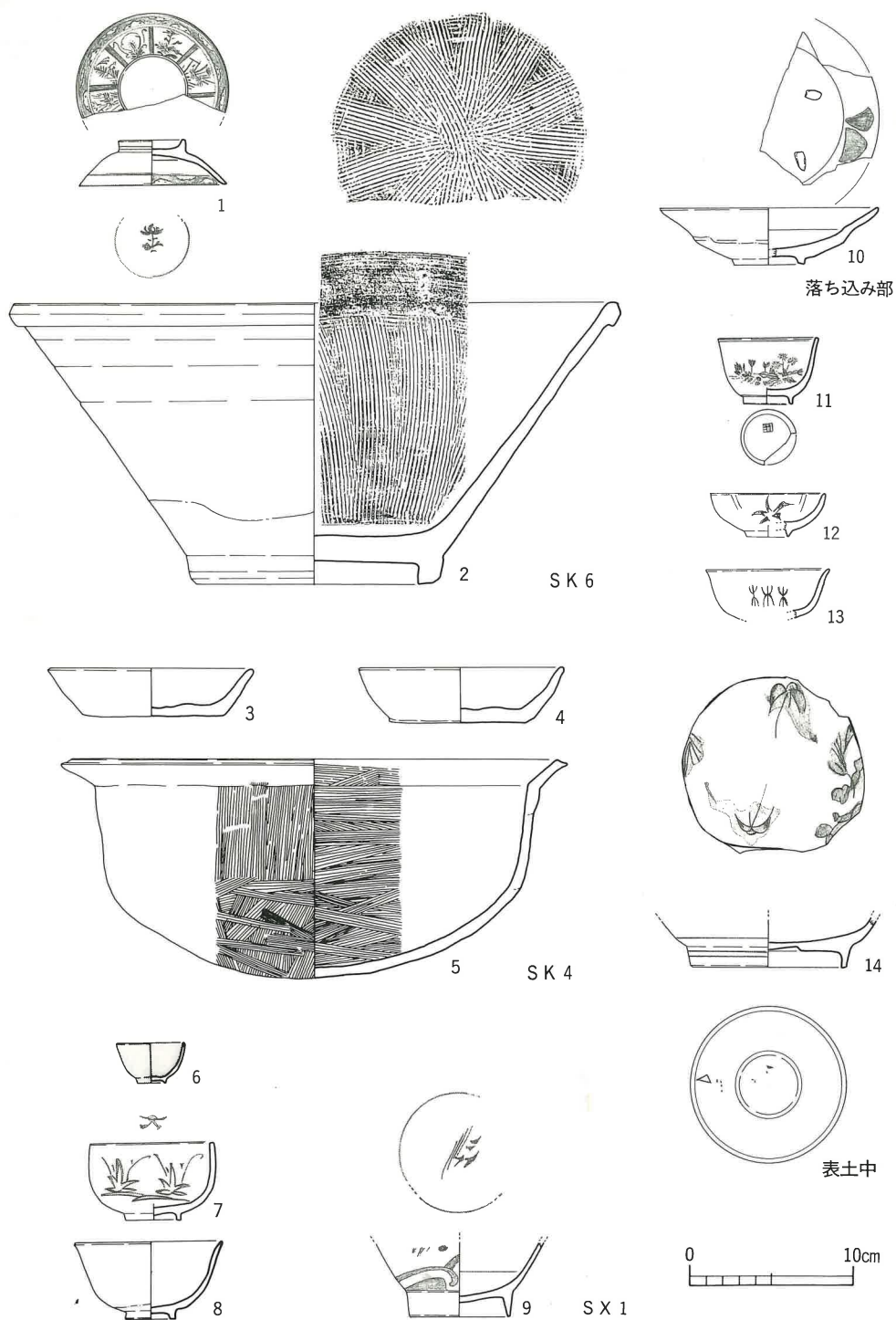


Fig.13 SK 6・SK 4・SX 1・落ち込み部・表土中出土遺物 (S=1/4)

1・2 SK 6 3～5 SK 4 6～9 SX 1 10 落ち込み部 11～14 表土中

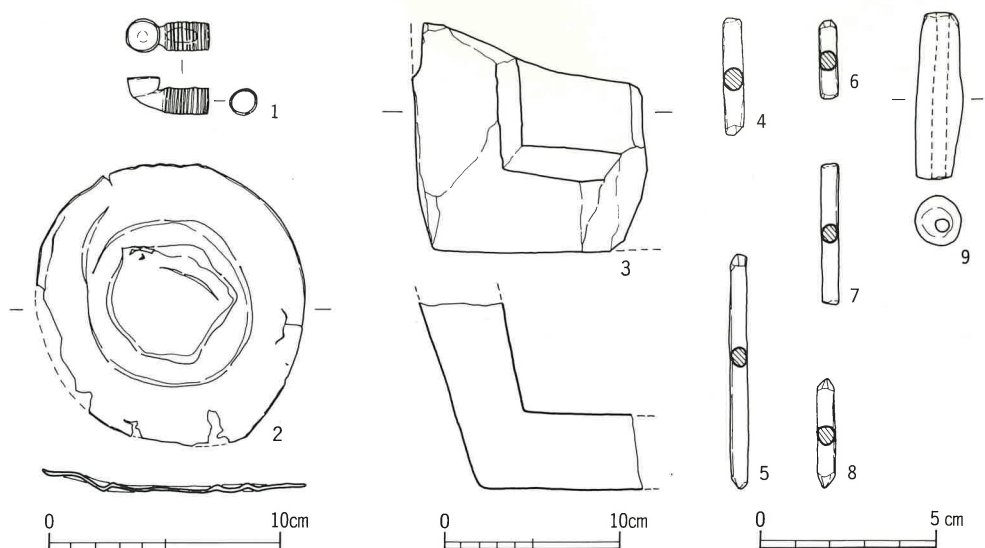


Fig.14 金属製品・石製品・土製品(1・2はS=1/3 3はS=1/4 4～9はS=1/2)
1・2 SK 2 3～5・9 SK 6 6～8 表土中

後半以降に比定される。

②土製品・石製品・金属製品

Fig.14-1は煙管雁首である。条線を施した筒部にはわずかな窪みが認められる部分があり、煙草の灰を落とす際にたたきつけた痕跡であろうと思われる。2は用途不明の円盤状銅製品である。なお図示していないが、これより小型のものが表土中より出土している。3は溶結凝灰岩製の石製品の破片で、おそらく手水鉢のような用途を持つものと推定される。4～8は「石筆」あるいは「石墨」と呼ばれる文房具で、材質は滑石である。9は管状土錘である。1・2はSK 2、3～5・9はSK 6、6～8は表土中からの出土で、表土中のものは詳細な時期を確定できないが、土坑出土のものは江戸時代後期から幕末までに比定できる。

③瓦類

Fig.15-1～Fig.16-21はSK 1出土の瓦類である。1～17は軒平瓦。1は1991年度調査報告のD-1類で、17世紀前半代に比定される。2はD-2類で17世紀前半から中頃、3はB類で17世紀前半代に比定できる。4は小片であるがI類に比定され、18世紀代の製作と思われる。5はE-7類で、18世紀後半代までには製作されていた可能性が高い。6～8の瓦当文様はG-2類あるいはG-3類としたものに類似するが、それぞれに小異があり、同範ではなさそうである。7には「引合」の刻印が認められる。9～12も前回報告の中に類例がない。9・10には「細義」の刻印が認められる。13～17はH類で、これにも図示したような刻印が認められるものがある。6～17の製作年代は、19世紀中頃前後に比定できる。Fig.16-18は軒丸瓦で、前回報告のTG類である。19～21は鬼瓦の破片である。22はSK 6出土の軒平瓦で、前回

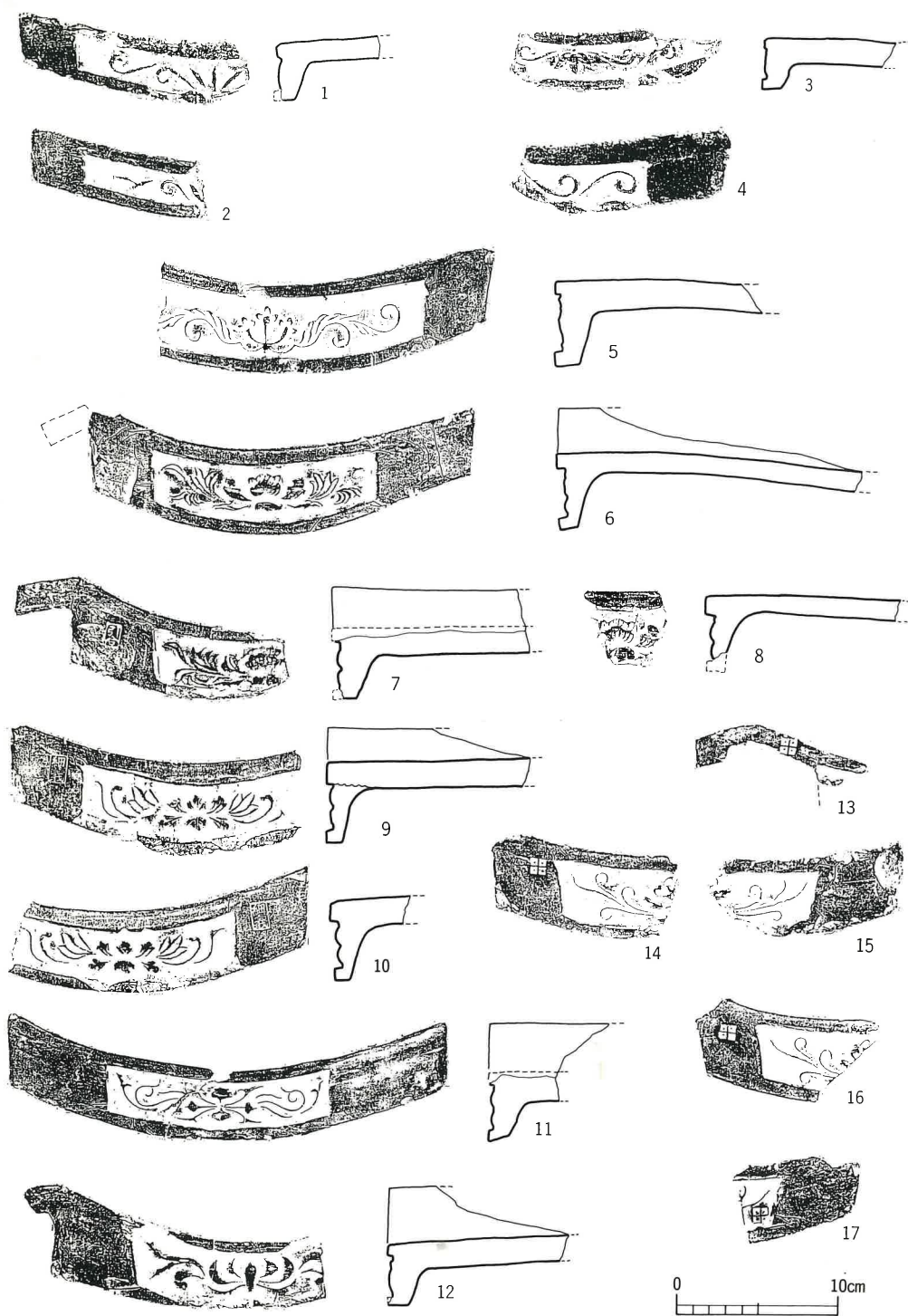


Fig. 15 瓦類実測図① (S=1/4)

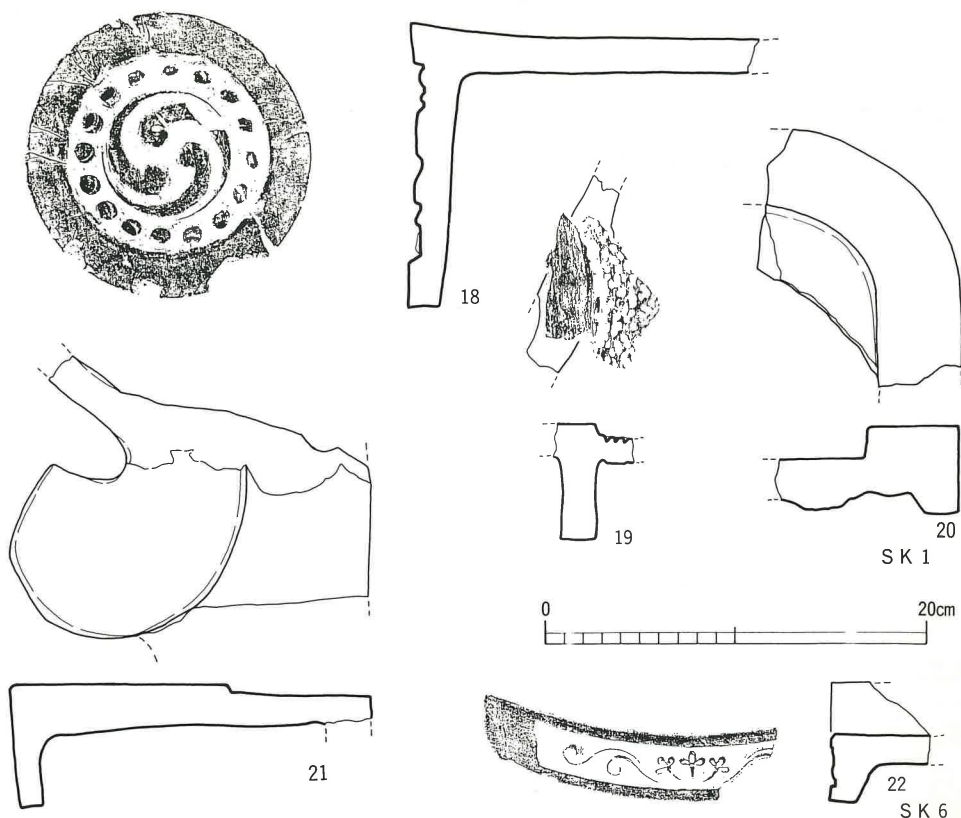


Fig.16 瓦類実測図② (S=1/4)

報告のE-8類である。18世紀後半以降の製品であろう。

Fig.17には今回の調査で得られた軒平瓦・平瓦に認められる刻印を集成した。このうち、⑥・⑦・⑨は今回の調査で初めて出土したものであるが、それ以外は1991年度の調査区で既に確認されていたものである。特に『府内藩記録』『御普請方日記』の記載によると、②の「細義」、③の「細和」、⑧の「細安」の刻印の使用年代の1点が安政4年(1857)に位置づけられることを指摘している。以上の刻印は、陶磁器との共伴年代の兼ね合いから、そのほとんどが幕末以前までに使用されたものであろう。

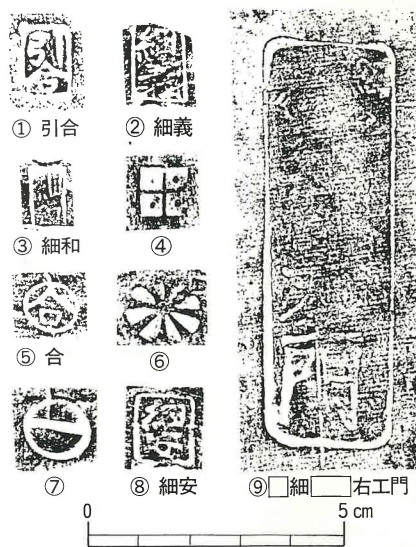


Fig.17 瓦にみられる刻印 (S=2/3)

①～⑥ SK 1 ⑦ SK 2 ⑧⑨ 表土中

III. ま と め

今回の調査成果をまとめると、次の2点に集約される。

①土坑SK1より、「入 孫九郎様」の焼継文字の入った肥前産端反碗（7頁）が出土したことで、本調査区付近が府内藩の家老や用人などを務めた木戸孫九郎の武家屋敷敷地内であることを考古学的に傍証した。

②土坑SK4の出土遺物（14頁）より、江戸時代の城下町形成以前の15世紀前半代に遡る時期から当該地点付近で何らかの生活の痕跡が存在していることが明らかになった。

①については文久3年（1863）作成と伝えられる「豊後府内藩御家中名前付」などの絵図と符合することを、本文中で既に指摘した（2頁）。また②については「戦国時代府内町絵図」（高山家所蔵）等の室町期の大友時代の府内城下を描いたとされる記載によると、本調査区付近は自然地形を利用した船入の周辺に相当する。また延宝9年（1681）に現在の大分市塩九升町に移築された長浜神社も、創建時の応永13年（1406）には本調査区の北東側約200～300mの地点に位置していたと伝えられている。調査面積の制約から、土坑SK4と船入や神社との関係を想定するのは早計に過ぎるが、本調査地点に室町期の遺物が出土する背景を以上のように考えておきたい。

江戸時代の出土遺物は、既に指摘した通り多量にのぼるものである。SK1には肥前産の端反碗が多く、瀬戸美濃産磁器が一定量認められるのに対し、SK2では18世紀後半代に比定される肥前産磁器が主体となり、瀬戸美濃産磁器が認められないなどの様相の違いがある。従って一括遺物相互の比較としてはSK2の方がやや古相を呈するが、SK1・2ともに最も新しい遺物が端反碗であることや双方ともに焼継が認められる資料が存在することから、両者に大きな時間差を認めることは難しいであろう。さらにSK3からもSK2と同類の肥前染付紅皿が出土していることやSK6からも肥前染付端反碗が出土していることに注意したい。つまり本調査区で検出された江戸時代の土坑は、すべて19世紀前半以降幕末までの短期間に形成されたものということになる。また貝を集積した遺構SX1の出土遺物の中で、最も新しいものは肥前染付広東碗の底部である。当該遺構出土の陶磁器類は少なく、時期を決定するには不十分であるが、それらが遺構の年代を示すものであるとすれば、SX1の貝類は19世紀前半代までに集積されていたことになろう。

個々の出土遺物についても、若干ではあるが新知見があった。特に瓦類については前回の調査で未確認の瓦当文様を持つ軒平瓦が出土したのに加え、刻印を有する軒平瓦も確認された。これらの資料が、江戸時代の瓦の編年的研究に一定程度帰与する可能性も高いが、紙幅の関係より、その詳細については別の機会に譲ることとしたい。



調査区全景（拡張前）



SK 1・SK 4全景



SK 4 遺物出土状況



SK 6 土層断面



SK 4 全景（拡張前）



SK 3 全景



SK 2 全景



①

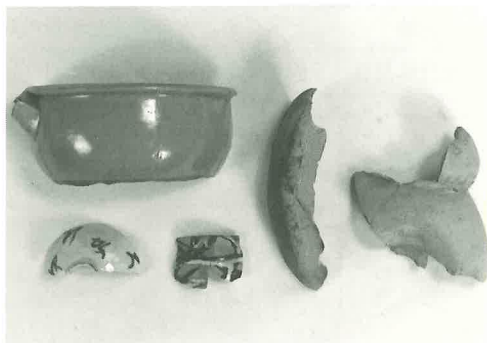


②

- ① SK 1 出土遺物
- ② SK 1 出土肥前端反碗
〔入 孫九郎様〕の焼継文字)
- ③ SK 2 出土遺物
- ④ SK 3 出土遺物
- ⑤ SK 4 出土遺物
- ⑥ SK 6 出土遺物 (焙烙)
- ⑦ SX 1 出土遺物
- ⑧ SX 1 出土貝類



③



④



⑤



⑥



⑦



⑧

フリガナ	フナイジョウサンノマル イセキ ニ
書名	府 内 城 三 ノ 丸 遺 跡 II
副書名	大分県共同庁舎前広場モニュメント建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	—
シリーズ名	—
シリーズ番号	—
編著者名	吉田 寛
編集機関	大分県教育委員会
所在地	〒 8 7 0 大分県大分市府内町 3 丁目 1 0 番 1 号
発行年月日	西暦 1 9 9 4 年 3 月 3 1 日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯 。 ’ ”	東経 。 ’ ”	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
フナイジョウ 府内城 サンノマル 三ノ丸	オオタマシ オオタマ マチ 大分市大手町 3 丁目 1 番 1 号			33° 14’ 20”	131° 36’ 55”	19930719 19930803	45	モニュメント（記念碑）建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特 記 事 項
府内城 三ノ丸		中 世 近 世	土坑 1 土坑 5 貝の集積 1	土師質土器坏 土鍋 陶磁器・土器類・ 瓦	土坑 S K 1 より「入 孫九郎様」の焼継文字入り磁器碗出土。

府内城三ノ丸遺跡II

大分県共同庁舎前広場モニュメント建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1994. 3. 31.

発行 大分県教育委員会
(〒870 大分市府内町3丁目10番1号)

印刷 佐伯印刷株式会社
(〒870 大分市古国府1155-1)

